

地域子育て支援拠点研修事業<京都開催>

《開催概要》

- 開催日 平成23年9月10日(土) 10:30~17:00
- 会場 龍谷大学 深草キャンパス 21号館
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・京都府・京都市
- 協力 京都きっずプロジェクト
- 参加者数 169人(行政37人・NPO/任意団体91人・その他団体/企業18人・その他23人)

《プログラム》

◆開会挨拶・主催者挨拶

財団法人こども未来財団 常務理事 安藤哲男さん

◆開催地代表挨拶

京都きっずプロジェクト 代表 迫きよみさん

◆プログラム1 基調報告 「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

[講師] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 里平倫行さん

国としての子育て支援対策の経過、地域子育て支援拠点事業が始まった背景、位置付け、ビジョン等、里平さんご自身の子育て経験も交えながらデータを基にご説明いただきました。また現在の最新情報である「子ども・子育て新システムについて」平成23年7月27日の中間とりまとめ、検討会議の経過、予算、財源について、国の基準や地方の裁量、また財源の動向など具体的内容についてもご説明を頂きました。これからの子育て支援の動向や仕組み等国政レベルでの政策の段階などを伺うことができ、有意義な時間となりました。

◆プログラム2 基調講演 『地域子育て支援拠点事業における活動の指標

「ガイドライン」について』

[講師] 関西学院大学 准教授 橋本真紀さん

地域子育て支援拠点事業が法制化された経過、第二種社会福祉事業としての位置付け、役割、ガイドラインを作った経過について、ガイドラインの内容、基本的な考え方、支援者の役割について等々大変わかりやすく具体例も示し、ご説明いただきました。

橋本さん自身がセンター職員であった頃の実体験も交えながら、支援者が地域で孤立せず、地域でつながっていくこと、地域資源と関わっていくことの大切さを熱く語っていただきました。

また、ガイドライン上の難解なとらえにくい言葉「子どもの最善の利益」「受容」「自己決定の尊重」「信頼関係」などについても拠点事業の中での読み解き方、支援者としてどう考え、行動に移していくのかということ、かみ砕いてご説明いただきました。



拠点スタッフは対人援助職であり、大切なことは、『覚悟』を持つこと、実践だけでなく、『知識』の両方が必要であること、当事者の特性だけでなく、自分自身が支援者としての強み、弱みを理解しながら活用していくことの大切さ、その場のもつ強み弱みなども頭に入れながら事業を組み立てていくなど支援者として心がけたい役割を整理して伝えていただきました。

◆プログラム3 分科会

<第1分科会>「地域子育て支援拠点の役割とは」

【コーディネーター】 橋本真紀さん 関西学院大学 准教授

【事例報告】 谷口郁子さん 宇治田原町地域子育て支援センター 元センター長

【事例報告】 佐々木香奈さん 京都市西賀茂児童館 児童厚生員

【事例報告】 岡本聡子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事



「センター型」「児童館型」「ひろば型」のそれぞれの拠点から事例発表をしていただきました。

谷口さんは、年間の出生数が70人前後という顔が見える関係の地域における子育て支援センターだからこそできる、地域住民と共に作り上げている「みんなの家」の報告をされました。また、実施する講座内容も、親が主役となり主体性を引き出す「ノーバディーズ・パーフェクト・プログラム」や、「子育て支援リーダー育成講演会」を行うことで、「私には何ができるだろう」という気持ちが親自身の中に芽生え、ボランティアグループが誕生した事例を発表されました。行政もここまで地域・当事者たちを巻き込んでひろば作りができるんだ、という感想がでました。



児童館型の佐々木さんは、登録制のクラブ活動と自由参加のひろばと、世代間交流、次世代育成の家庭支援事業の紹介の後、「つなぐ」をキーワードに人と人、人と地域、人と情報、人と他機関・他施設、人と児童館の事業の事例を話されました。そして、児童館だからこそできる母親クラブ活動や学童クラブへの移行など、長期にわたって関わることで、親同士も支え合える拠点となり続けることができるのが児童館の特徴だということがよくわかりました。

NPOの岡本さんからは、ひろばのスタッフの役割として、利用者に寄り添う・守秘義務・ニーズを拾う・利用者の問題の背景を想像する・スタッフ間のコミュニケーション、などの行動の中から失敗事例を具体的に挙げていただきました。スタッフの価値観の違いや多様性がある中、改めて現場を振り返る機会となり、失敗と気付かないで見落としがちな行動を、丁寧な関わりの中で拾い上げていく力が必要だという学びにつながったという声がフロアからでました。



後半は、振り返りシートで気付いたことをまとめた後、グループで各々の活動の交流をしました。10代の母親たちが組織するサークルも、センター職員も、行政職員も、立場が違っても「地域に根ざす広場作り・サークル作り」を目指す思いは同じだと感じる事ができてよかった、という言葉が聞かれました。

<第2分科会>「拠点スタッフの役割」

【コーディネーター】 武田信子さん 武蔵大学 教授

【事例報告】 会田千鶴さん

NPO 法人そよかぜ子育てサポート 京田辺市子育てひろば「てふてふ」リーダー

【事例報告】 朱まり子さん NPO 法人山科醍醐こどものひろば 「げんきスポット0-3」施設長

「京田辺市子育てひろば てふてふ」の会田さんから、徹底した環境（空間+人）づくりへのこだわりについて、お話がありました。お母さんと子どもたちを笑顔にする拠点スタッフの役割について、保護者への対応・子どもへの対応等を詳しく説明していただきました。

朱さんからは、商店街の中にある「げんきスポット0-3」の日常の様子、母親が我が子だけでなくいろいろな子どもと関わる様子などを紹介いただきました。ひろばは、利用者にとって地域や社会を感じられる場、仲間づくりの場であり、親子の持つ力を十分に発揮できるようにスタッフは黒子に徹して、「支援」を振りかざさないことなどを話していただきました。

その後、参加者をスタッフの経験年数順に並び替え、新人からベテランまでバランスよく配置されるように8グループに分かれ、武田先生のコーディネートによるグループワークが始まりました。

前半は、「拠点スタッフの役割」について2つの事例から読み取る作業や自分が日頃から果たしている役割と事例の比較検討をし、改めて「拠点スタッフの役割とは何か」学んだことをまとめる作業をキーワードを示しながら進めました。

後半は、武田先生から子どもの養育環境を整えるための政策の図を説明いただき、ひろばの中での役割の充実など内向きの発想から、自分達の地域に目を向けてみることで、拠点としてできること・できないことをはっきりさせるという外への発想をお話いただきました。そして、地域でのひろばの役割の発想をベースに、「今すぐ支援が必要なこと」、「将来のために今、条件整備が必要なこと」を参加者それぞれの地域の特性をもとに出し合いました。

最後に、地域には多様な拠点やスタッフの役割があり、すべてを引き受ける必要はないが、その強みをどのように発揮するのかを参加者に投げかけられました。スタッフの役割を、事例を通して考えることから始まり、地域の中の拠点という広い視野で拠点やスタッフの役割を捉えてみる発想の広がりを感じることができました。



<第3分科会>「親の悩みに寄り添うために」

【コーディネーター】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

【事例報告】 園田正世さん だっことおんぶの専門店 北極しろくま堂有限会社 代表

【事例報告】 都智華子さん ボディケアセラピスト 日本誕生学協会認定 誕生学アドバイザー

「この分科会は豪華客船ではありません。手こぎボートです」というコーディネーターの松田さんの言葉、そして、この分科会を設定した熱い思いを京都きつずプロジェクト代表の迫さんからお聞きするところから始まりました。まずは二人一組での支援者の引き出しとして持っていたい簡単なストレッチ。そして、事例発表者からの今のこの仕事に関わるようになった経過をお話いただき、専門職としてのお二人の「ひきだし」を学びました。後半は、利用者がどんな気持ちになるのかのロールプレイ、そしてグループワークをし、今後、支援者としてできることを語り合いました。

◆アイスブレイクから

都さんの指導のもと、二人一組で簡単なワークをしました。一人が椅子に座り、一人はその後ろに立ちます。椅子に座っている人は両手を横に水平に上げ、手のひらを前向き、そして後ろ向きのとくとそれぞれ手を背中に回します。手のひらが後ろ向きの際に後ろに回りやすい人が多く、「回るわ」と喜んでいると、「それは猫背になっている証拠なんですよ」と都さん。正常な腕の可動域は後ろでピタッと両手が合わさると最後は都さんの実演もあり、会場からは、「凄いなあ」と感嘆の声。都さんの張りのある暖かい声が会場に響き、「息をすうーっと吸ってください」という言葉が胸にジーンと染み込んできました。



出産後、赤ちゃんとの生活で視線を下に向けて生活していることが多く、夜眠れない、腰が痛いという親の悩みに対しても、今回教えていただいた簡単なストレッチを二人一組ですると、視線も上に上がり、吸う空気もいつもと異なり表情も明るくなることを参加者同士で体感しました。

◆園田さん

子育て中の親子の日常には欠かせないおんぶひもやだっこひもという切り口から親にどうアプローチされているのかというお話をしていただきました。園田さんは、日本や世界の文化や歴史からおんぶやだっこに興味を持たれ研究されています。また、スリングも使い方が間違っていると腰が痛くなる原因になること、赤ちゃんの位置や赤ちゃんの姿勢、スリングの長さについてなどぬいぐるみを使って実演しながら説明いただきました。支援者自身も道具に対する知識を蓄えることで利用者へのアプローチも変わってくることを学ばせていただきました。

また園田さんは、人の手を借りずに赤ちゃんを運べる道具を使うことで、震災時の逃げ方や、兵児帯を使つての赤ちゃんの守り方などの活動も幅広くされていることもお話いただきました。

◆都さん

ボディケアセラピストとして当事者の身体と心に日々寄り添いながら仕事をされている都さんからは、ひろばの中ではなかなか見えてこない親の身体と心の状況についてお話いただきました。都さん自身の生い立ちから「身体」と向き合う仕事にかかわられるようになったきっかけ、また、ご自身が拠点事業の草分けである「ひろば」の参加者からご自身の専門を生かして今の活動をされるまでの経過を赤裸々にお話いただきました。

「腰が痛い」というひとことでも、その人によって「痛い」という感覚はいろいろ。ぴりぴり痛いのか、どんなときに痛くなるのか、いつから痛いのか等々、その人のことを知りたいという姿勢を持ちながら接するとその人自身も心を開いてくれ物理的な痛さの裏に隠されている心理的な感情が吐露される場合もある。「しんどいね」と傾聴、共感する以上のものを支援者も必要とされることを強く感じました。



◆後半のロールプレイとグループワーク

お母さんの気持ちになってロールプレイをしました。「子どもの抱っこが重いし、腰が痛くてしんどいです」と話す利用者役と支援者として①今だけよと励ますだけ②私もそうだったのよと懐かしがる③井戸端会談的に昔から産後ってそうよね など、3パターンの役割で言われた時の感想を出し合いました。

その後、園田さん、都さんが支援者となったときの対応を話していただきました。

「利用者のマイナートラブル」について出し合う作業をしながら、利用者の違和感や不快感に対して拠点としてどんなことができるかということをグループで語り合いました。

この分科会では、支援者自身が自分自身の強み弱みに気づきながら、利用者の「しんどい」という悩みに「しんどいね」と寄り添うだけでなく、そこからもう一歩、知識を得たり、他の専門職、地域資源の手をかりることで利用者のしんどいを解消したりやわらげることができるという、「引き出し」をたくさん持つきっかけになった分科会であったと思います。

◆プログラム4 全体会（分科会総括・ディスカッション）

【第1分科会】 岡本聡子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事

【第2分科会】 朱まり子さん NPO 法人山科醍醐こどものひろば「げんきスポット0-3」施設長

【第3分科会】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

【コーディネーター】 深尾昌峰さん 龍谷大学 准教授

・第1分科会（岡本さん報告）

拠点運営について、自分自身が型にはまっていた見方をしていましたが、NPO が担っても、行政が担っても、「こういう拠点を作ろう」という思いがあれば、形態や経緯は異なってもいいのだと思いました。

（深尾さんから）3つの立場から事例を話してもらったからこそ気づいたこと、見方からくる違いなどの気づきがあったのではないのでしょうか。

・第2分科会（朱さん報告）

地域がどんなふうに繋がっていったら社会がどう変わっていくかを外国の事例も交えて武田先生から聞く中で、もっと地域を巻き込んでいくのが大切だと思いました。

（深尾さんから）地域につながるとお題目では言うが、なかなか難しいことです。拠点スタッフは、ニーズの最前線にいて、5年後、10年後を見据えていくことが大切です。また、次のステップのためには、地域で活動する困難さや悩みなどを抱えながら活動している支援者への支援のあり方も考えていくことが必要で、支援者同志弱音などを言える関係や場も必要だと思います。

・第3分科会（松田さん報告）

親の悩みや寄り添うということ、違う角度から見ようと子育て期の身体に向き合う仕事をされている方をお迎えしました。立場が異なる関わり方をしていると親からの聞こえてくる声が異なってくるということを実感していただけた分科会であったと思います。

（深尾さんから）拠点に来られる親子を見る目がぐんと変わったかもしれません。プロの真似をするのではなく、その拠点の中の強みを生かしていくこと、また直接支援を充実するだけでなく、対外的な部分、行政や施策に反映したり理解をしてもらうという仕事も私たちにもできるのでは。

・まとめ（深尾さん）

支援者には拾えないニーズを拾える方と繋がっていくことも支援者として大切で、自分の地域の拠点の周りを見渡してみてもどうでしょう。「プロボノ」（各分野の専門家が、職業上持っている知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動全般）という考え方も盛り上がっています。営利非営利を問わず、できないことは、できる人たちを利用し吸引しながら力をつけていくことが必要ではないでしょうか。また、今日の参加者には男性はちらほらでしたが、もっとこういうところに男性も巻き込んでいくことが、今後は大切になってくると思います。

